

Winking at the Devil

一、朝

眠りが浅いのは毎日のことだ。

もともと深く眠るたちではなかった。それが、ここへ来て、磨きが掛かったようだ。

足音は聞こえない。近づいてくる人の気配。足音は殺せても、呼吸^{いき}までを止めることはできない。呼吸^{いき}をすれば、空気が動く。空気が動けば、気配が生まれる。

気配が生じる、消え、また生じる。

呼吸のリズムを乱さない。ここでは、微かな寢息でさえ、命取りになりかねない。

気配の動きが止まり、そして、ふっと消えた。一秒、二秒…

——来る！

跳ね起きると、足音が殺到してくるのが同時だった。身体を半回転させてうつぶせになるなり、両手で思い切り地面を突き放す。そのすぐ脇を黒い影が凄まじいスピードで行き違った。

「…!？」

「…!!」

鞘から引き抜いたマッシュグレイ^{マッシュグレイ}刀が、昇りきらない朝日を弾く。光の尾を引いて黒い影にたたきつけられる。刀の重さ、気配を殺し足音さえ隠しきった襲撃者の影が、古い記

憶を蘇らせる。

——兵法など、いくさ人には無用のこと。いくさ場では太刀行きの速さと力だけが頼りじゃ：

渾身の力で振り下ろされたジャッシュ^{ジャッシュ}デイル^{デイル}刀は、確かに影をまっぴたつに叩き割った。手加減はない。傷つけるだけで相手を捉えようと欠片ほども思わぬ、必殺の一撃。

影が二つに分かれた：と見えたのは錯覚だった。

肉を断ち、骨を砕く手応えの代わりに、空を切る唸りと柔らかな地面を厚い刀身が切り裂く鈍い音。

し損じた、と思うよりも早く、からだが動いていた。振り下ろした勢いで身体を前に投げ出し、半ば転げるようにして体を入れ替え、反動でジャッシュ^{ジャッシュ}デイル^{デイル}刀を引き寄せ、次の一撃に備える。

影が動きを止め、人間の言葉を発した。

「オーケイ、ジェイク。合格だ。集合しろ」

しばらくは応じない。腰を沈め、刀を構えたまま相手の目を覗き込む。

ここでは言葉は信じられない。迂闊に信じて武器を仕舞おうものなら、背後から襲いかかられて散々な目に遭わされる。本物のいくさと変わらない。ただ一つ、ほんとうのいくさと違うことがあるとすれば、殺されないことだけだ。

「：イエス・サー、FJ^{エフ・ジェイ}」

応えたときには、すでに影は視界から消えている。かさりという音さえしなかった。わずかの間に鍛え抜かれた皮膚感覚と、常人には決して与えられることのないあの感覚が、遠ざかっていく人の気配を察していた。

近くに溪流の小さな流れがあった。

【集合場所】はその流れの向こうにある。まだ明るくもなっていない中、靄が凝ったような人影が数個、透けて見えていた。

露出した岩を選び、足音を殺して流れを渡る。

——！

渡り終えるか終えないかの内に、あたりの静寂を圧して銃声が轟いた。

問答無用で、地面に身を伏せる。周囲の人影も一斉にその高さを減じていた。

銃声は一発だけではなかった。百雷と言うほどの轟音ではなかったが、一瞬も途切れることのない銃声が辺り一帯空気を濃密な硝煙の匂いに満たしていく。

火縄銃の一斉射撃はすでに記憶の彼方に消え去りかけていたが、機銃掃射の轟音はまだ記憶に生々しい。噴き上がった血しぶきの鮮烈な臭気が、さびた鉄片を噛みしめたような異様な金属臭を帯びて鼻腔の奥に蘇る。

溪流の岸辺に着弾の水しぶきと土煙。碎かれ、はじき飛んできた小石の欠片がコンバット・スーツに食い込む。吹き飛ばされた土塊が、横合いから頬を打つ。

平手で張り飛ばされたような衝撃に、直江は思わず上げかけた呻きをかみ殺した。

必死に肘に力を込め、ひたすら頭を伏せて地を這い進む。不気味な風切り音を立てて銃弾が頭上を通過し、跳ねとんだ弾丸の欠片が脇腹に食い込む。焼けた火箸を押しつけられる激痛。

「か…げ…と…ら…さま」

その眩きを漏らしていることに、直江自身が気づいてたかどうか。

「かげとら様…いったい、あなたは…」

かわりなく、両腕両足は彼を前へ前へと押し進めていく。

「どこに…あなたは…なぜ、なぜ…！」

不意に、銃声が止んだ。

ほとんど反射的に跳ね起きる直江の前後左右で、次々に身体を起こす男たちの姿があった。巨漢ばかりだった。日本人としては間違いなくずば抜けた長身の部類に入る直江である。その彼でさえ、彼らの中ではごく平均的な体躯の持ち主にしか見えない。

「…やるな」

場違いな陽気な声は強いラテン訛を帯びた英語だった。

「エフジェイにガスふっかけられて、吊されてやがったのが昨日みてえな気がすんのによお」

「余計な口を利くな、アル！」

大きくはないが、鋼の鞭を仕込んだような叱声だった。

にやにや笑いを浮かべて直江に話しかけてきたラテン訛の男は、たちまち頬を強ばらせて直立不動の姿勢をとる。

巨漢たちを前にすると小柄にさえ見える男だった。きちんとしたスーツを着込んで町中を歩いていれば、ごく普通のビジネスマンにしか見えないのではないか…直江はそう思う。

だが、その目は…

巨漢たちを見回していた男の目が直江に向けられ、固定する。一瞬の隙もない、しなやかな野獣を思わせる深い目。戦場に慣れ、いくさの場だけがあるべき場所だと思いいこんでいる男の目。

——四〇〇年前には、こんな目をした男たちが無数にいた。

無用なことを考えている場合ではない…叱咤するもう一人の自分がいる。

いつもなら素直に叱咤に従う直江だった。

しかし、今日はなぜか心の中にしつこくまとわりつく想いがある。振り払っても振り払っても、様々の思念の断片が脳裏にこびりつく。粘りの強い汚れのように離れない。

——彼は、彼らは現世の人間だ。彼らの生き方は、彼らの選んだ生き方だ。誰も異議を唱えるようなものではない…

「ジェイク！」

「…！」

「余計なことを考えてるんじゃない！」

「はい、エフジェイ」

エフジェイと呼ばれた男は、もう一度、ほんの少し自分よりも高い位置にある直江の両目を覗き込んだ。

「死ぬぞ」

——死んだら…また、換生する…何度でも何度でも、生けるものの生命、人生を横取りしながら、果てしもなく…四〇〇年生きてきた。これから何百年も…

どすっという重い衝撃を鳩尾に受け、思わず二つに折れ

かかる身体を、直江はかろうじて支えた。うかつに前屈みになろうものなら、エフジェイの肘撃ちが盆のくぼに炸裂し、さらに膝で顎を蹴り上げられ、泡を吹いて昏倒することになる。

「∴明日からエスケープ・アンド・イヴエージョンの実習だ。忘れるなよ、ジェイク」

二、 迷路

「ヨシアキ∴か、オレたちには発音しにくいな」

エフジェイは【義明】を【ヨシエイク】と発音した。

「ヨッシーと呼んでいいか」

冗談ではない。

「願ノリ・サンキュい下げです」

「なぜホウワイ・ナットだ？」

それではまるでコンピュータ・ゲームのとぼけ面の恐竜ではないかと説明してもしょうがない。

「いやなのアイ・ドン・ライク・イットです」

「では∴ジェイクというのではどうだ」

「ジェイク？」

「日本人ジャパネーズのJと、ヨシ・エイクの組み合わせでジェイクだ。

それともヨッシーヤ・ブリック・ヨッシー・トゥ・ジェイの方がいいか？」

「∴ジェイクジェイク・イズ・マイ・チョイスでけっこうです」

「よろしい、ジェイク。オレのことはFJエフジェイでいい。ただし、命令を受けたときには絶対服従。オレを呼ぶときにはサー
と言え。これが絶対の義務だ」

約一年前。

大学を卒業したばかりの直江を苛んでいたのは徒労感だった。

「お前だけは決して許さない！」

幾度換生しようと、決して消え去ることのない憎悪と拒絶の言葉を胸の奥に呑み、直江は彼の唯一の主を追い求め、ついに報われていない。

その間、換生に換生を重ねた四〇〇年前の怨将たちは、しだいに凶暴の度を増してきていた。短銃ばかりではなく、時には重火器や軍用犬、様々な薬物を駆使する怨将も現れ、彼ら夜叉衆をさえ窮地に陥れることが少なくなるにつけ、直江は遂に夜叉衆の長老である色部に提案したのだ。

「――傭兵の訓練を受けに行く？」

意外そうな顔ではなかった。

「…信長との戦いがあれほどの苦戦になったのも、我々が調伏力に頼って、近代兵器や戦術に疎かったからではありませんか。家族や友人を人質に取られ、薬物で操り人形にされてしまっても、我々の知識では打つ手がなかった、違いますか」

「それを学ぼうというわけか？」

「…ええ」

色部は即答を返そうとはしなかった。ずいぶん長いこと、直江の表情を見つめ続け、問うたものだ――それだけなのか、と。

「あの人のことを…忘れようとしているわけじゃありません」

「そうかな……」

「考えて考えて、思い続けて思い続けて、さらに思い続けて…こんなにも愛し続けて…それでも行方はわからない」

「なぜ、そんなに焦るんだ。焦ることはない。景虎は見つかるさ」

「そんなことをわたしが疑っているとも思っているんですか？」

「……」

行ってくるがいい――それが色部の返事だった。

嘘ではなかった。しかし、完全な本心でもなかった。

直江はそう思う。

二〇年近く…上杉景虎の消息は杳として知れなかった。

織田信長の『破魂波』に真っ向から立ち向かい、魂核そのものを粉々に碎かれ、浄化してしまったのではないか…恐ろしい疑いと、無事に換生してほしいという祈るような心持ち、そしてあの『お前だけは決して許さない』の言葉の狭間の中で、直江の心は右に振れ、左に揺らめいた。

アメリカ流のビジネス・スタイルを学びたい…そう言う理由で、アメリカ南部のとある州立大学のビジネス・スクールに願書を出し、合否も聞かずに日本を飛び出してきた。ビジネス・スクールから届いた、入学を認める通知など無視して、直江が向かったのはその大学から車で数時間の位置にある、ある特殊な学校…傭兵学校だった。

話をつけてくれたのは、やはり色部だった。

どういう知り合いなのか、それは直江も知らない。 FJ エフジェイ

とだけ呼ばれる傭兵の開いているこの学校に、色部は紹介状を書いてくれた。紹介状を一読したエフジェイが直江に投げつけた最初の言葉、それが——「ヨシアキ……か、オレたちには発音しにくいな……だったのだ」。

最初は散々だった。

入校した翌朝。

顔面の激痛に直江は跳ね起きようとして、起きられなかった。

顔一杯に吹き付けられたガスが、まるで燃え上がっているような激痛を与え、彼は不覚にも失神した。

我に返ったとき、自分が何をされているのか分からなかった。

何もかもが逆さまに見え、パニックに陥りかけた。

身体をロープでぐるぐると縛り上げられ、木の枝から逆さまに吊されていると気づくまでずいぶん時間がかかった。

頭の下……地表までは優に五メートル。見上げると、ロープをくりつけた枝は今にも折れそうに大きく撓い、ぎりぎり和不気味な軋みを上げていた。

「傭兵になろうって男が、陽が昇る時間までのべのべ寝てんじゃねえ！ それじゃ、殺^やつて下さいってんと同じだ」

FJ^{エフジェイ}の叱責はシビアだった。

その次は、ロープで崖を下っていくラペリング。

ロープを伝って降りて行く直江のすぐ脇に、いきなりエフジェイが実弾を撃ち込んだきたのだ。

機関銃か……と思ったとき、直江は反射的にロープを手放していた。しがみついていたら狙い撃ちにされるだけ……戦国武将としてのとっさの判断が、ロープを握りしめようとする肉体の反射を上回った。

身体が宙に舞い、つかの間の頼りない浮揚感覚に続いて、背中が水面を打つ派手な水音。

「あの判断は正しい」

それがエフジェイの“講評”だった。

「ああいうときは落ちちまえば怪我で済む。しがみついたりや、座^{シット}り込んだ鴨^{ダック}と同じで蜂の巣にされるだけだから」生活の一瞬一瞬が試され、神経のぎりぎりまでの緊張を強いられる。

ジャングル^{ジャングル}刀を脇に抱いて眠る癖がついた。

どんな銃でも狙いを定め、的に当てることを学んだ。決してエフジェイに褒められるレベルには達しなかったけれども。

野生のコメを集め、小動物を捕らえて食料にするすべを学んだ。

いつしか時の感覚が薄れていった。いくさに明け暮れし、ひたすら生き延びることと手柄を立てることだけにすべての価値を見いだしていた四〇〇年前の戦国の感覚が、直江を支配するようになった。

だが……

——これでよいのか、こんなことをしている間にもあ

の人は…

憎いのか、愛おしいのか、会いたくてたまらないのか、それとも会うことが怖くて仕方がないのか。

逃げているのではないか…近代的な戦術と兵器に関する知識を身につけるという口実で日本を離れたのは、現実からの逃避ではないのか。四〇〇年分の【時】の持つ、凄まじいまでの重みから逃れたくて、最も原始的な肉体と精神の酷使に逃げ込んでいないのか…

色部もそれを察して、『行って来い』と言ってくれたのではないか。

悔恨と自責が胸の奥を嘯む。

——たとえ、最初に浴びせられるのが罵声であっても、自分はその人の声を聞き、姿を見たいのではなかったのか…それとも、浄化という安易な道を選んだかも知れないあの人に向かって、自分はこんなにも努力し、自らを鍛え抜いているのだと誇りたいのか…

分からなかった。何が本心なのか、もう自分でも分からない。無限に巡り続けるようにさえ見える、この迷路からいつか出られるのかも分からない。

——あなたは、卑怯だ！

景虎その人を欠いて、この果てしのない堂々巡りから抜け出すことはできない。にもかかわらず、**彼**は呼びかけにも応えない。

——わたしの前に姿を現さず、その苦悶する姿を一人、高処から見下ろしているあなたは卑怯者だ…卑怯者だ…

ジャングル刀を抱え込んで短い微睡みに入るとき、直江

は夢とうつつの狭間に景虎の姿を追いつめる。

しかし…

直江の脳裏に浮かぶのは、あの女美奈子の姿。その目に浮かぶ憎しみと嫌悪は、その姿の本来の所有者のものではない。

『お前だけは絶対に…絶対に許さない！』

夜。

「…!？」

その男が現れた時、すでに直江はコンバット・ナイフを手にかけている。間合いが詰まっいて、ジャングル刀は使えない。

害意はない、というつもりか、その男は両手を軽く差し上げて見せ、たき火を挟んで向かい合いように腰を下ろす。年齢は三〇代半ばくらい。長身にはひとかけらの贅肉もなく、鋼の鞭のように引き締まっている。たき火だけが唯一の明かりの中では暗く沈んでいる両の瞳は、冷たく碧い。

その男のことを直江はわずかに知っていた。

DディーDと呼ばれていた。直江がジェイクと呼ばれているのと同じようなもので、むしろ本名ではない。

傭兵たちは口数が少ない。ディーディーも例外ではなかった。

ささいなきっかけだった。

昼間、傭兵たちが口を利くことはほとんどない。

銃剣ベヨネットの訓練中、直江の関心を引いたのはディーディーの

瞳の色だった。

「珍しい目の色だな」

訓練の後、思わず呟いた直江の声が、たまたまディーの耳に届いたらしい。日本語だったし、理解されるとは思わなかったのだが。

「何か言ったか？」

「いや……？」

「日本人ダケガ、日本語ガワカルナドト思ワナイ方ガイイ」ディーディーが発した言葉を、しばらく直江は理解できなかった。

日本語だ、と分かったとき、銃剣バヨネットの切っ先が直江の喉元に突きつけられていた。

「戦場ならこれで終わりだ、ジェイク」

笑いもしなかった。

「珍しい目の色だ、そう言ったただけだ、ディーディー」

視線が動かなかった。睨み据えているのでも見つめていないのでもない。直江の姿を風景の一部としてしか認識していないのかも知れない。その瞳は、青とも水色ともつかない不思議な色合いを帯びていた。

「シアン・ブルー……」

ややあってディーディーはぼつりと言葉を漏らした。硬い英語だった。エフジェイに言わせると、【スラブ訛】とやらがあるらしいのだが、直江には分からない。アルのラテン訛よりも、日本人の直江にとっては遙かにわかりやすい。

「シアン・ブルー？」

「イン・ジャパニーズ
日本語だど？」

色に詳しいわけではなかったが、数秒の沈黙の後、経験がものを言った。

「縹はなだ色が近いな」

「ハナダ？」

「ハナダ・ブルー……青ブルーでも水色スカイブルーでもない、繊細で美しい青の色だ」

苦笑するでもなかったが、ディーディーは銃剣をおろした。

「——オレには似合わない」

自嘲するような呟きだった。

それ以来、ディーディーは、あの陽気なラテンのアルを除けば、わずかでも直江と言葉を交わす数少ない存在になっている。

そのディーディーがたき火の向こう側に座り、静かな動作でナイフを抜く。手入れを始めた。

「エスケープ・グループだな、ジェイク」

「ああ」

翌日から戦闘実習が始まる。傭兵たちは二つのグループに分かれ、一方が逃げ、一方が彼らを追う。逃げるグループ：エスケープ・グループは、追跡グループ：アグレッサー・グループの手を逃れ、一週間逃げ続けなければならない。

「何日保たせる？」

「七日だ」

「無理だな。一日、逃げ切れれば上出来だ」

初日に囚われようものなら、即日、エフジェイに【出て行け！】の一言を食らう。言い訳は効かない。その一言が出れば、ここから即刻姿を消さねばならない。

「なぜ？」

「オレはアグレッサー・グループだ」

「わたしが日本人だから、七日は無理だということのか？」

「最初のコースで、オレは三日しか保たなかった」

「淡々と事実だけを告げる口調だった」

「保たせてみせる」

「…」

答えはない。唐突に話題をうち切ると、ディーディーはそれきり直江への関心を失ったようだった。

注意を武器に戻そうとしたとき、背後に気配を感じて直江はさっと腰を浮かせる。一瞬の数分の一で護身壁を張り巡らせるために口に呪言を含む。【力】を使うことのためにはいなかった。

同時に、ダッシュして手にしたナイフを突き出せるよう、脚と腕をぎりぎりにまで撓めた。

ほとんど同時に、ディーディーの姿がたき火のそばから消えている。完全に気配を消し、辛うじて靈査で微かに存在が感じられる。

「オレだ、ジェイク」

数メートル離れた薄闇の中に、エフジェイの姿があった。

「何か？」

「毎度のことだ。戦闘実習の前夜には全員の様子を確認する。たまに実習に耐えられんのに黙っているヤツがいるからな」

休ませるのですか、とは問わなかった。

「そういうやつは前の夜の内にオレがのしちまって、つまみ出す。体調も維持できねえヤツに戦場は無理だ」

特に意外でもなかった。

歩み寄ったエフジェイは、直江のナイフ、ジャングル刀、小銃をいちいち手にとって点検する。手入れが不十分だったら、その場で【出て行け！】と吼えるに違いなかった。

エフジェイは軽くなってから武器を地面へ戻した。

合格だったらしい。

「…ジェイク」

「イエス・サー？」

「ササキはお前がササキの組織の戦闘要員だと書いてきていた。護衛するべき相手がいて、敵からその人間を守りきるためには最高の戦闘技術が必要だってな」

【佐々木】は色部の現世での名だった。

「その通りです、サー」

「なら、お前は死ねないな。護衛役が死んちまっては、護衛は務まらない」

「死ぬつもりは…ありません、サー」

「ならな…ジェイク、あれを止めろ」

「…?」

「ストップ・ウインキング・アット・ザ・デヴィル悪魔にウインクすることだ」

「悪魔に…ウインク?」

「どんなに技術を磨いて磨いて磨き抜き、からだ肉体と精神を鍛え上げても、悪魔にウインクしていたら、弾丸がお前に吸い寄せられてくる」

悪魔…? 悪魔なのか…

——そうか、あなたは悪魔なのか。あなたを追い求めることは、悪魔に媚びを売るようなものなのか。

「止める、ジェイク」

エフジェイの口調が夜気を震わせた。

「余計なことを考えるな」

いつの間にかたき火のそばにディーディーが戻ってきていた。さして関心も示さずに黙々と武器の手入れを続けている。

「さもなければ、死ぬぞ。アグレッサー・グループはエスケープ・グループを殺すことは認められていない。が、事故でも偶然でも死ぬヤツは死ぬ。死ぬヤツは、決まってオレがこう思ったヤツだ。あいつ、悪魔にウインクしてやがるってな」

軽く顎をしゃくった先にディーディーの冷たく凝った目があった。

「ディーディーには死ねない理由がある。だから、ヤツは絶対に悪魔の目を見ようとしねえ。お前にも死ねない理由があるはずだ。ササキが本当のことを書いてきていたんならな。」

気になったんでな、忠告だ。死人が出るっていうのは後味がいいもんじゃない」

エフジェイは踵を返した。

「第一、後かたづけが大変だ」

ぜんぜん冗談に聞こえなかった。

三、 悪魔にウインクを送るな

陽が翳っていた。

気温 ^{フレンハイト} 華氏 一〇五度 (摂氏 四〇・五度)。湿度 八〇・九パーセント。

風はなく、雲もほとんどない。

じりじりと照りつける日差しは、それ自体が圧力を持つような錯覚を覚えさせ、頭から肩をぎりぎりと呼さえつけるようだ。

戦闘実習の一日目はまだ暮れてさえないなかったが、三週間の訓練で教え込まれた様々な ^{カムフラージュ} 偽装やトラップはまるで無力だった。むろん、直江自身、そんなものがディーディーのようなベテランの傭兵に通じるとは思っていなかった。

そうしたカムフラージュに加えて、毘沙門天の力を借りての結界を施しておいたのだ。いかに百戦錬磨の傭兵といえども、人間である。毘沙門天の力までを破れるはずはなかった…

ディーディーは嘘もほらも口にしなかった。

安心していただけではなかったが、食料と水を手に入れるために移動しようとした直江の前に、まるでそこで待っていたかのように、ディーディーは姿を現したのだ。

「——っ！」

間一髪の間分の一かのきわどさで『護身壁』が初弾を眉間の直前で受け止めたとき、直江は身体を放り投げるように地面に伏せていた。

反射的に『護身壁』を張る。精神統一の余裕がなく、豪雨のように注ぎ込まれる小銃弾を弾き飛ばすのが精一杯だ。三週間に渡る訓練の成果を見せて、すばらしい速度で地を這い逃げていく直江を追って、『護身壁』に弾かれた着弾が土煙を上げ、落ち葉を吹き上げ、小石を叩き砕く。

直江は愕然とした。

「実弾!？」

実習では実弾を使わない。命中しても決して致命傷にならない小弾丸で代用する。

だが、ディーディーの自動小銃が吹き上げる着弾煙の高さは決して小弾丸のものではない。

「なぜだ…！」

信じられなかった。

なぜ、ディーディーが彼を狙うのか。間違って、小銃に実弾が入っていたとでも言うのか。

——違う…

ディーディーがそんな間違いをするわけがない。万が一、万々が一、そんなミスをしたとしても、ディーディーなら最初の一発でそれが実弾だと悟るはずだ。

直江から五〇メートルほど離れて立っているディーディーの彫りの深い顔立ちに、赤みを帯びた陽の光が血の色の彩りを与えていた。表情はない…いや、着弾を避けて

逃げ回る直江に、ディーディーの表情を読みとっている余裕などない。

だが、少なくともディーディーが、自分が何をしているか明確に理解していることだけは確かだ。

何発もの銃弾が直江の身体をかすめ、コンバット・スーツを引き裂く。やけ火箸どころではなく、真っ赤に焼けた鉄棒を押しつけられる激痛が全身を駆けめぐる。

「くうっ！」

【力】で反撃する余裕すらない。速すぎる、そして正確すぎる！ 万に一つの僥倖を当てにして逃げ回るしかない。

…掃射が一瞬止んだ。

空になった弾倉マガジンを無造作に捨て、ディーディーは新しい弾倉を小銃に装着する。

わずかな隙だったが、それで十分だった。

渾身の力で張り巡らせた『護身壁』に小銃弾が食い込んで火花を散らす。ホルスターから短銃を引き抜きざまに、連射を浴びせかける。

牽制しか期待していなかった。

ディーディーの小銃と違って、直江の短銃には小弾丸しか入っていない。五〇メートルは短銃にとって遠すぎる。それでも当たればそれなりのダメージは与えられる。

だが、当たらない。

ディーディーの動きはわずかに体を開いただけだった。その足下にささやかな土煙が上がり、背後の茂みブッシュが大きく揺れる。

「――！」

裂帛の叫びとともに、直江は『念波』を撃ち放つ。怨将ならぬ常人に向かって『念波』を使うのは初めてだったが、躊躇ためらっている場合ではなかった。いかに鍛え上げられた傭兵といえども、この世ならぬ『念波』を浴びせられて、無事に立っていられるはずはない。

ディーディーの背後で、茂みブッシュが二つに裂けた。木立が揺れ、軋み、太い枝が薙ぎ払われるように吹き飛ばされる。

しかし…

「なにいつ?！」

『念波』がディーディーを避けていく！ 確かにディーディーを真っ正面から襲ったはずの『念波』が二つに裂け、ディーディーの身体から反れていく。

「馬鹿な！」

直江は『念波』を連射した。

足下で、爆発するように地面が抉れ、衝撃と轟音がディーディーを襲う。が、直撃しない。

逆に、『念波』を放とうとした直江の足下に強烈な衝撃が来る。跳ね飛んだ小銃弾の一発が、ブーツのかかとを吹き飛ばしたのだ。

足下をすくわれ、直江はバランスを崩す。

地面に腰をついた時、ディーディーが小銃を捨てるのが目に入った。

低い姿勢。

フル・スプリントのダッシュをかけながら、西日を弾いて背中から血の色の刃が噴き伸びる。突進する勢いもそのままに、弧を描いたジャングル刀ジャングルナイフが真っ正面から直江に襲

いかかってくる。

立ち上がっている暇はなかった。

ジャングル刀^{ジャングルナイフ}を鞘から引き抜きざま、渾身の力で刀身を払う。

耳が痛くなるような凄まじい金属音が響いた。

三週間の訓練と、武将として実戦に参加した古い経験とが直江を救った。常人なら、一撃で腕が痺れ、返す一撃で刀を吹き飛ばされ、続く斬撃で首と胴とを切り離されていたに違いない猛烈な斬撃を、直江のジャングル刀が辛うじて受け止め、弾き返したのだ。

刀身の重さをまるで感じさせないスピードでディーディーの刀が旋回し、薙ぎ払い、突き込み、切り下ろしてくる。

一合、二合、三合と打ち合う内、一撃ごとに直江は圧倒されていくのを感じていた。

何合目をうち払ったとき、いきなり蹴りが来た。ジャングル刀で切り払うよりも早く、肩口を蹴り飛ばされ、上体を地面にたたき付けられる。

すうっと視界が翳った。

反撃を警戒して左へ回り込んだディーディーがジャングル刀を振りかぶった。

——く…ダメかつ

換生者の死は、単なる宿体の死にすぎない。換生者は、新たに生まれてくる生命から肉体を盗み、何百年もかりそのの生を生きていく。主体の肉体は、何百年、ひよっとすると専念にも至るかも知れない彼らの仮の通過点でしかない。

い…

陽が落ちたらしい。

あたりが急速に薄闇に包まれ始める。夕陽の最後の残滓を弾きながら、ジャングル刀が光の尾を引いて落ちかかってきた。

『早く！』

——え？

『早く、早く…来い！』

——誰だ、誰がわたしを呼ぶ？

『早く、来い。早く、迎えに来い！』

視界がすうっと広がる。

人影が見えた。

ひどく小さな人影。背を向けている。微かに震えている。

「わたしを…呼んだのですか？」

『どうして来てくれないんだ！ どうして、どうして！』

記憶のない声だった。だが、直江は、魂が上げる歓喜の声と戦慄を確かに感じていた。喜びと期待、怯えと躊躇い。そうであってくれと思いつながら、そうであってほしくないと言う思いが胸一杯に満ち、言葉を震わせる。

「あなたは…どうして、背中を向けているんですか。こっちを向いて下さい。こっちを向いて、顔を見せて下さい」

震える小さな肩にそっと手を載せる。

いやいやをするように、小さな人影は直江の手を拒む。

「お願いです。こつちを、こつちを向いて下さい」

強引に……強引なほどの力を込めて、振り向かせる。

少年だった。

傷だらけの顔、今にも溢れそうなほど一杯に涙を盛り上げた目が、哀願と拒否、思慕と嫌悪を湛えて直江を見上げてきた。

見間違えようにも見間違いのない、その目は――

「あなたは――！」

周囲を強烈なプラズマが駆け抜けた。

地雷が炸裂したような轟音と衝撃が走り抜け、眩い白光のドームが直江とディーディーを覆い尽くした。

我に返ったとき、最初に目に入ったのは満天の星々だった。合衆国南部特有の粘り着くような熱気が頬を撫で、直江は自分がどこにいるのかを思い出した。

惨憺たるありさまだった。

彼を中心として半径一〇メートルあまり、ちょっとしたクレーターと言っていぐらいの窪みが地面に穿たれ、周囲の木々は、至近距離で爆風を食らったように幹が折れ砕け、枝が薙ぎ払われている。

――ディーディーは？

五メートルも離れていないところに、ディーディーは仰向けに倒れていた。ジャングル刀は一〇メートルほども

吹っ飛ばされ、柔らかな地面に突き立っている。

二本のジャングル刀をディーディーの喉元で交差させるように地面に突き立てる。ディーディーがどう身動きしようとも、一瞬後には厚い切っ先が頸動脈を食いちぎるよう、ぎりぎりまで刀身を食い込ませてから、直江はディーディーの水筒の蓋を取った。

水筒の水を顔に浴びせられ、ディーディーはばかりと目を開いた。

「話を聞かせてくれ、ディーディー」

「……」

「契^{シトラクト}約か」

「そうだ」

「相手は誰だ？」

答えはない。

ふ……と直江は眉を顰め、視線をディーディーのコンバット・スーツの胸ポケットに移す。

「――これは？」

古ぼけた紙入れと一緒に、およそ傭兵には似つかわしくない守り袋のようなものが、半ば千切れかけた胸ポケットから転げ落ちかけていた。紙入れの中には半ば変色した古い白黒写真と簡単なメモが数枚。そして、守り袋は……

「――！」

取り出そうとして指を触れた直江は、指先から伝わってきた電撃にも似た衝撃に思わず声を上げた。

「阿弥陀如来の法力……一向宗か」

それで謎の一部が解けた。

阿弥陀如来の法力は、夜叉衆が最も苦手とするものだ。

ディーディーがいつも容易く結界を破って直江に追いつけたこと。『念波』がディーディーを直撃する寸前に四散したことも、彼がこの護符を身につけていたとすれば……

「それは、返してくれ、ジェイク」

「守り袋は返せない」

「ちがう……紙入れ……いや、中の写真だ」

「写真？」

星明かりにすかしてみる。細面で彫りの深い若い女性と、三〜四歳くらいの子が笑っているのがほの見えた。女の子の顔立ち、どこことなくディーディーに似ていた。

「家族か？」

「家族だ……」

呻くような声。

「どういう意味だ？」

「殺された」

「誰に？」

「……にさ。亡命してくる途中に、亡命者狩りに引つかかってな」

「——！」

「一〇年前さ。妻は殺され、娘は脊椎を撃たれて一生、自分で歩くこともできない身体にされた。オレには金がある。娘を一生養って行けるだけの。だから、今度の契約も受けた。娘のために……娘とオレを庇って撃たれた妻のために、オレは死ねない。どんなことがあっても……だ。……が、しく

じった。殺れたと思った途端に、吹っ飛ばされた。あれはなんだったんだ？」

「ディーディー……」

「ああ……ジェイク、どうした、殺らねえのか？」

ふらりと立ち上がる直江に、ディーディーの声が初めて動揺を示した。

——これが、お前が悪魔にウィンクしない理由なのか、ディーディー。

「殺らない……いや、殺れない」

「甘いな、ジェイク。それが命取りになるぞ……あいつが言っていたのは本当だったらしいな」

「——あいつ？ 坊主か？」

「違う」

言下にディーディーは直江の言葉を否定する。仏教徒の僧侶じゃない。若い男だった。真っ黒い髪を肩まで伸ばした美しい美形、最初は女かと思ったくらい。その言葉は、直江を愕然とさせる。

「美しい美形の……若い男？」

「ああ……しゃべれるのはここまでだ、ジェイク。行っちゃうなり、エフジェイに報告するなり、好きにしろ」

応える代わりに、直江は二本のジャングル刀を引き抜く。凄まじい全身のバネを生かして跳ね起きようとするディーディーの額に、直江は印を結んだ指を指しつける。電撃を受けたようにディーディーの全身が痙攣し、今度こそ完全に気を失って地面に崩り折れた。

コンパスと星で方向を確認する。

今夜の内に、この傭兵学校の敷地を出るつもりだった。胸の中で、窮地の中で見た幻影にも似た少年の姿とディーディーの言葉が結びつき、一つの確信が生まれていた。

あの少年が、絶体絶命の窮地での幻覚かも知れないとは、何故か思わなかった。

——あの人は呼んでいる。わたしを呼んでいる。

誇り高く、他者に屈するのを潔しとしない景虎^{あな}。それゆえに、淋しくて淋しくて、淋しすぎて、手を伸ばして払われることが怖くて、人に哀願することもできない。

自分の居場所はやはりここではない。帰らなければならぬ。

どんなに堂々巡りに苦しみうとも、想い続け、愛し続けるその人の姿が見いだせなかつとも、自分の居場所はここではない。

——わたし以外の誰が、あなたを迎えに行けるというのか：

景虎を探し求め、探し続けることが、直江にとって唯一、『悪魔にウイंकを送らない』ための生き方なのだから。

もしオレが戦場で死んだなら
ふるさとのみんなにつたえてほしい
オレはベストを尽くしたと
かわいいあの娘に伝えて欲しい

楽しい思いを抱えていくと……

遠くから歌声が聞こえてくる。

空耳に違いなかった。エスケープ、アグレッサー、どちらのチームの傭兵も、こんな時に歌を歌うわけではない。

しかし、直江は、それが空耳だとはどうしても思えなかった。

オレの墓に名前はいらない
ただ一人の男が生き、闘い
死んでいったと刻んで欲しい

おわり

筆者註…本編は、猫屋真が『炎の蜃気楼』（桑原水菜、コバルト文庫）の原作に準拠したパロディとして某サークルに寄稿した単発の一篇です。原作と外伝『アウディ・ノス』を読み合わせた上で、矛盾のない設定としたつもりです。

なお、傭兵に関する記述はほとんどすべて、『傭兵部隊』落合信彦、集英社文庫 ISBN 4087490042 に拠りました。作中の FJ は、同誌に登場するフランク・J・キャンパリーのイメージ、DD は何人かの傭兵のイメージを重ね合わせたものです。